

シャロレ伯爵 (8)

リヒャルト・ベア＝ホフマン著
松川 弘*・訳

(平成30年10月19日受付)

Der Graf von Charolais (8)

von
Richard Beer-Hofmann

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Oct. 19, 2018)

フィリップ:

でも、僕が今、ここから出て行ったら、誰とも君のことを話せないだろう！僕は、夜に、僕たち二人が庭を通って行くのを見てもらいたいんだ。そうすれば、僕がどこへ行くかと、夜と、君のことを話し合えるじゃないか！「夜よ、お前は彼女を見ただろう。美しくなかったかい？」と、僕は言うだろう。「夜よ、彼女は僕を愛してくれないんだ。僕が彼女のことをこんなに愛しているというのに！」と、僕は嘆くだろう。コートをはおって、来てくれ！戸口のところまで送って行ってくれるだけでいい！

(しきりに頼む)

コートをはおってくれ！

(彼女の肩にコートをかけ、ゆっくり庭へ出る戸口に向かって歩み出す)

さもないと、病気になってしまうよ。君の頬は燃えるように熱い。おき火に当たりすぎたんだね・・・

(二人は、庭へ出る戸口の敷居に立って、雪に埋もれた月明かりの庭を見渡す。彼は、夜空を指差す)

何て素敵な夜なんだろう！

(庭に下りながら)

君の額には、雪が心地良いんじゃないかい？

(もはや彼らの姿は見え、声だけが次第に小さくなっていく)

ほたん雪が僕たちを覆ってくれる・・・

(部屋は暗転する。暖炉のおき火が崩れて消える。大きく開いた庭へ出る戸口から、月明かりが幅広く差し込んでいる)

シャロレ:

(背後のドアを通して入ってくる。帽子とコートを雪まみれにしている。後方に向かってきびきび呼びかける) 厩舎の馬丁に、馬の体をよく拭いてやるよう、もう一度言ってくれ！

(あたりを見回す)

どうしてこんなに暗いんだ？

(後方に呼びかける)

灯火を持ってきてくれ！

(バルバラが、右手のドアから入ってくる。多枝の燭台を持っている)

バルバラ:

(驚いて)

伯爵様？

シャロレ:

えっ？ 私だよ！

(バルバラは、驚いて部屋の中を見回す)

どうしたんだ？ 燭台を下ろしてくれよ！ 何を見つめて

* 広島工業大学工学部電気システム工学科

いるんだ？

(バルバラは燭台を手に持ったままである。ドアをたたく音がする)

どうぞ！

書記：

(入ってきて、申し訳なさそうに)

玄関の間には、誰もおられませんので・・・

(老下僕が入ってくる。彼は、多枝の高い銀製の燭台を持った若い下僕をともなっている。若い下僕は、燭台を書き物机の上に置いて退室する)

シャロレ：

裁判長はここにはいないよ！ 宰相が、思いがけず、枢密顧問官たちを会議に召集されたんだ。六時にそれが始まる！ それに、今朝、彼は君を捜してたよ。ロモントはもう地所から戻って来てると思うんだが、彼が持参した見積りに、彼の立ち合いでざっと目を通しておいてくれないか？

書記：

(お辞儀して)

かしこまりました！

(三つ枝の銀製の燭台を二個持った下僕が入ってきて、背後に立つ)

シャロレ：

(老下僕に向かって)

大尉殿に言ってくれ・・・

老下僕：

ロモント大尉様は、まだお戻りではありません！

シャロレ：

ああ、そうだね、忘れてた・・・

(書記に向かって)

でも、もうすぐ戻ってくるに違いない。向こうの宿屋に行ってるんだろう・・・

(老下僕に向かって)

彼が戻ってきたら、それを書記君に知らせてやってくれ！

(老下僕は退室する)

(書記に向かって)

君はここで待つつもりかね？

書記：

伯爵のお許しがあれば、図書室で待っております。

シャロレ：

(微笑みながら)

またそこで一仕事か！ そうだろう？

(下僕に向かって)

燭台をここに！

(下僕は、右手の低い本棚の上に燭台の一つを置く。もう一つの燭台を持って、彼は書記の先を照らして歩く。彼らは、右手の隠し戸を通して退室する)

シャロレ：

(控えの間に向かって呼びかける)

厩舎の馬丁に、蹄鉄工を呼んで、今日中に馬に蹄鉄をはめておきましょう言ってくれ！

(バルバラに向かって)

切り通しが雪で埋まっていたんだよ。明日は別の道を通ることにしよう！ あの児はもう眠ったかい？

バルバラ：

はい！

シャロレ：

家内に、私が戻ってきたことを知らせてやってくれ！

バルバラ：

でも、奥様は、つい今し方までここにいらっしゃいましたよ！

シャロレ：

(帽子とコートを置き、剣と手袋をはずす。それらを、窓際のひじ掛け椅子の上に置く)

僕がここに入ったときには、いなかったよ！

バルバラ：

そこにある灯火を、私は奥様のために持ち込んだのです！奥様は、あそこの暖炉のそばにお掛けでした・・・

シャロレ：

(飽き飽きしたように)

彼女がここにはもういないってことは、見れば分かるだろう！ 行って、彼女に言ってくれ・・・

バルバラ：

ですが・・・

シャロレ：

(いらいらして、右手のドアを指し示す)
向こうに彼女はいるんじゃないのか？

バルバラ：

寝室ですか？ その部屋を奥様が通り抜けて行かれるのを私は見ていたんですよ！ 私はずっと坊っちゃんまの寝台のそばに座っていて、ご想像のように、眠ってはいませんでしたわ。

シャロレ：

(腹を立てて)

そんなはずはない！ いい加減に行って、僕が戻ってきたことを、彼女に伝えてくれよ！ 上にいなければ、多分、下に行ったに違いない。女中部屋だ。行ってきてくれ！

(バルバラは、燭台をもち、背後のドアを通過して出て行く)

シャロレ：

(考えあぐねて)

彼女が下にいたとすれば、僕が入ってきたとき、声が聞こえたに違いないんだが……

(彼は書き物机に歩み寄っている)

なぜ灯火が揺らぐんだろう？

(あたりを見回す)

そうか！ 戸が開いてたんだな！ 風で開いたのかな？

(戸を閉めるために、庭へ出る戸口へ向かう)

(背後のドアが急に開く。ロモントが飛び込んできて、部屋を一瞥するが、シャロレがいることに気付かないロモントは右手のドアに向かおうとする)

シャロレ：

どうしたんだ？ ロモント！

ロモント：

(驚いて)

君か？ 今、ここに来たのか？

シャロレ：

切り通しが雪で埋まってたんだよ！ どうかしたのか？

ロモント：

別に！

(以下の会話は、次第に早口に交わされ、ついには、息もつ

けない問いと答えの応酬にまで高まる)

シャロレ：

(不審そうに)

苦しそうに息をしてるね。息を切らせてる！ 一体、どうしたんだ！

ロモント：

何でもないよ！ 走ってきたんだ。急いでね。それだけだよ！

シャロレ：

(不安そうに)

「何でもない」だって！ 君はたった今、ここに飛び込んできて、まるで誰かを探しているように、あたりを見回してたじゃないか。誰を探してるんだい？

ロモント：

誰も探してやしない！

シャロレ：

その部屋の中に入ろうとしたんじゃないのか？

バルバラ：

(戻ってきて)

奥様は下にもおられません！

シャロレ：

(彼女の言葉をちゃんと聞かず、ロモントを見つめて)

もういい！

(バルバラは退室する)

ロモント：

(小声で、ぶつぶつと)

それじゃ、彼女はここにはいないのか？

シャロレ：

(不安を募らせて)

誰のことだい？ 家内のことかい？ それじゃ、君は彼女を探しているのか？ どうしてなんだ？ なぜ、通りから息を切らせてやってきて、ここで彼女を探すんだ？ 彼女がここにはいないから、驚いてるのか？ 外で何があったんだ？ 言ってくれ！ 火事かい？ 通りで壁でも倒れたのかい？ そのとき、彼女が路上にいたのか？ 何をおびえてるんだ？ 君は何を僕に隠してるんだ？ 言ってくれよ！

ロモント：
それは出来ない！

シャロレ：
それを見たのか？！

シャロレ：
(叫ぶ)
彼女は死んだのか？

ロモント：
ああ！

ロモント：
生きてるよ！

シャロレ：
(書き物机の上の燭台に手を伸ばして、ロモントの顔を照らす。燭台を下ろして、そっけなく、軽蔑するように)

君は酔っ払ってるんだ。

シャロレ：
やれやれ！ 嘘じゃなかろうね？

(前に進んで立ちどまり、ロモントに背を向けて、無理に落ち付かせた厳しい声で)

自分の部屋へ行くんだ！ 眠って、酔いを覚ませ！ 明日、君がしらふになったら、僕たちの友情に免じて、君を許そう！

ロモント：
僕は彼女を見たんだ！

(怒りが心中に沸きあふれる。脅迫するようにこぶしを固めて、彼に迫る)

シャロレ：
どうもよく分からんな！ 君は彼女を見たのに、どうしてここで彼女を探してるんだ？

酔いに任せてとはいえ、よくもそんなでたらめを・・・
(気を静める。首を振って、ロモントにドアを示し、小声で)

ロモント：
僕の見間違いであってくれればと思うんだが・・・

行くんだ！

シャロレ：
はっきり言ってくれ！ 君は何を見たんだ？

ロモント：
(頭を上げ、シャロレを見つめる。彼のまなざしは、悲しみにあふれている。小声で言う)

それじゃ、出て行くよ！
(ドアの方に向かう)

ロモント：
君の奥さんとフィリップだよ・・・

シャロレ：
(突然叫ぶ)

シャロレ：
どこでだい？

ロモント、君は酔っ払ってるようには見えない！ 彼らを本当に見たのか？

ロモント：
宿屋でだ・・・

ロモント：
彼女と彼だった！

シャロレ：
向かいのか？

シャロレ：
君の見間違いかも知れない！

ロモント：
ああ！ 中庭の階段の下でだ・・・

ロモント：

僕は、彼女のコートを見覚えている。幅広の黒テンの皮の縁が付いたやつだろう！

シャロレ：
彼女を見たんだな？！

シャロレ：

ロモント：
彼は、奥さんの肩に自分のコートを掛けていた・・・

(否定するように首を振る)
コートはたくさんある！

ロモント：

暗闇の中で、彼女のイヤリングのルビーが赤く輝いていた！

シャロレ：

(必死に拒絶するように)
間違いなく、彼女だったのか？

ロモント：

彼らが階段を昇って行ったとき、上から、あかりが彼女の顔を照らし、それがぼんやり見えたんだ……

シャロレ：

はっきり見たんだな？

ロモント：

ああ！ 彼女のブロンドの髪は雪をかぶっていた。彼女は、よろめいているように見えたが、フィリップが彼女をつかみ、立たせ、支えていた……

シャロレ：

(突然叫ぶ)

「彼女をつかみ、立たせ、支えていた」だって！ 嘘だ！ みんなでたらめだ！ さもなくば、思い違いだ！ 家内は出かけていやしない！ この家に、その中にいる！

(バルバラが入ってきたドアを指差す)

彼女はちょっと見つからないだけだ！ もうじき、彼女は現われるだろう。僕たちが話している今にも、ここにやって来て、君を赤面させるだろう。次の瞬間、ドアから入ってくるだろう！

(各々のドアを、最後に庭へ出る戸口を指し示す)

このドアから、いや、あのドアから……

(不審を抱いて話しやめる)

あのドアは、前から開いていたかな？ あんなに大きく？！

(庭へ出る戸口に駆け寄る)

足跡かな？

(ロモントに来るように目配せする)

見ろよ！ 雪の中に二つの足跡がある！ 二つだ！ 男と女のだ！

(テラスに出て、足跡を目でたどる)

階段を降りて、石のベンチの方かな？ いや、もっと先の池まで？ いや、月の光ではっきりしないが、壁の所までだ！ 一方の、女の足跡は、ここに返ってきているのか？ もう一方は、その後ろに、いや、ほとんど女の足跡と並んで付いている……

(いらいらして)

また向きを変えて、元の道に戻り、それから、どこに続いているんだろう？

(いまいましそうにふり仰ぐ)

月に雲がかかっている！

(信じたくなさそうに)

どこに続いているんだ？

(驚いて、ロモントに小声で)

君にはどう見える？ 僕の見間違いじゃないだろうか？

ロモント：

(小声で)

戸口の方だ！

シャロレ：

(小さくうなずいて、ゆっくり、小声で)

そうだ！ 戸口の方だ！ これがその跡なのか？

(熱に浮かされたように、言葉が矢継ぎ早に出てくる)

そんなことはありえない！ これは夢にすぎないんだ、ロモント！ 前に——僕が彼女を最初に見たとき——僕はこれと同じことを言わなかったかね？ しかし、あのときは現実だった！ それなら、今のは夢に違いない！ あそこに嬉しげに立っていた彼女が、今——自分の子供を捨てて——あの道を——彼とともに——下って行った女と同一であるはずがない！ 夢だ！

(空に向けて手をもむ)

夢を止めて下さい！ 私を目覚めさせて下さい！ 私はまだ、苦しみ抜いてはおりません！ 悪夢が、私をさらに悩ませ、不安に陥れるかも知れませんが！ もはや目覚めることが出来ないとすれば、夢魔が私の命を奪い、私を絞め殺すなら、私は叫び声をあげて目覚めるでしょう！ 主よ！ 夢を止めて下さい！ あの暗闇の中に立っている私の友人が私の家内について吐いた暴言は、真実ではありませんね！ あの雪の中に残った足跡の私にたいする誹謗は、真実ではありませんね！ 私がここに立ち、四周の壁、不安、闇から逃れられないのを感じ、同時に、彼が家内を立たせ、支え、足で蹴ってドアを閉め、彼女と一つに絡み合って、寝台に倒れ込む有様を目の当たりにしたように感じるの、これは夢なのですね！

(かん高い叫びをあげる)

僕は叫び声をあげたね？ 目覚めているんだろうか？

(テラスの雪に手を伸ばして)

これは雪だね？

(暖炉のおき火に触れ、飛び退く)

この火は、何を焦がしたんだろう？

(ロモントの頬に触る)

どうして君は、そんなに哀れみをこめて僕を見つめるんだい？ これは現実なのか？ そうなのか？

(立ち上がって、額を叩く)

この愚かな僕は、家内がまだ生きていることで、彼に感謝しなければ！

(うなだれて、部屋の中を大股でゆっくり歩く)

ロモント：

君は何をするつもりなんだ？

シャロレ：

(立ち止まって、そっけなく)

自分でも分からない！ 学校でも、軍隊でも、宮廷でもこんな場合どうすべきか教えてはくれなかった！

(身を震わせる。しぶしぶ命令するように)

ドアを閉めてくれ！ 寒くてたまらん！

ロモント：

(庭へ出る戸口に行く。右手の隠し戸を通して、書記が入ってくる)

ああ！ あんたか！

さて！ ちょうどよい時に来てくれた！ ここに掛けてくれ！

(書き物机の方を指し示す。書記は彼を見つめている) 今は何も聞いてくれるな！ お願いだ！ その紙とペンで書き留めてくれ！

(書記は腰を下ろして、書く準備をする。彼の後ろにシャロレが立っている。彼は、見かけは落ち着いて、じっと前の方を見ている)

シャロレ：

(書き取らせる)

「私は・・・」

書記：

(振り返る)

「私」ですか？

シャロレ：

(うなずく。指で自分を指し示す)

「私こと、ヴィルヘルム、シャロレ伯爵は・・・」表題のための余白を残しておいてくれ。あとで差し込めるようにね。

「私は・・・」

(もどかしく)

どうも書式がよく分からない。手伝ってくれ！

(早口で)

裁判長が二年前に私に与えた全財産を、彼に再び譲り渡すこととする・・・

書記：

(仰ぎ見る)

どうしてです？ 全部ですか？！

シャロレ：

全部だ！ さらに私は、自分が、私の父の遺体を請け出すために彼がああとき出してくれた全額の債務者であることをここで明らかにしておきたい！ 形式を整えて、合法的に文書化してくれ。最後に、私が署名するからね。急いで書いてくれ！ お願いだ！ 私に残された時間は短いから。

(呼び鈴を鳴らす。入ってきた下僕に向かって)

その剣と・・・

下僕：

(シャロレが帰宅したときに外した剣に手を伸ばす。彼はそれをシャロレに差し出す。蠟燭の光の中で、柄や鞘にはめ込まれた多くの宝石がきらめく)

どうぞ！

シャロレ：

(下僕の手から剣をもぎ取り、それを床に投げ出し、怒りながら下僕の身振りをまねる)

そうじゃない！ 人が話し終るまで待てないのか！ あそこの大きな戸棚に、剣と飾り帯、剣帯、拍車が入れてある。それらをみんな、こっちに持って来るんだ！

(下僕は退室する。シャロレは剣を再び取り上げ、右手前面に置いてある長持に近づく。嫌悪を示す手つきで、錦糸の刺繍がしてある覆いを外す。彼は蓋を開けて、剣を、続いて、自分のもってきた豪華な剣帯をその中に投げ込む)

よし！ これもだ！

(ネックレスをはずす)

これも！

(決然とした動作で、指輪を両手から抜き取り、長持に入れる)

これでよし！

(質素な印章指輪を再び取り上げる)

これはだめだ！ 父の形見だからな！

(手を触れる)

もうないかな？

(自分の胴着を開いて、首に掛けていた宝石の付いた護符を絹糸から乱暴に引きちぎる。長持の中に、その他のものとあわせて投げ入れる)

これでよし！

（苦笑する）

こいつは、まだ何から僕を守ってくれるというんだろう？

（ホッと深呼吸する）

いいだろう！

（ポケットに入れていた鍵で、長持を施錠する。下僕が入ってくる。シャロレが劇の冒頭で身に付けていた剣、剣帯、飾り帯、拍車を、彼は抱えている）

シャロレ：

（暖炉の左手の安楽椅子を指し示して）

あそこに置いてくれ！

（下僕は、持ってきたものを全部その上に置いて、出て行く。シャロレは、書記の方に振り向く）

用意は出来たかね？

（書記は身を起こし、パンを彼に差し出す）

シャロレ：

（どこに署名すべきかよく分からず）

どこにすればいいんだ？

書記：

（場所を指示する）

ここへどうぞ！

（机の上にかがみ込んで、立ったまま署名する。書記は、その間、蠟燭の炎の上に封蠟をかざしており、溶けた蠟をシャロレに渡す）

書記：

封印して下さい！

（彼にその場所を指し示して）

ここです！ 注意して下さい！

（蠟のしずくが紙の上になれる）

シャロレ：

（小声で）

血みたいだ！ 血のしたたりだ！

（赤い蠟のしたたりを見つめる。それから、決然として指輪を外し、印章を蠟に押し付ける）

これで封印は出来た！

（書記に向かって）

終わりかね？

書記：

はい！

シャロレ：

私は旅に出る。今からすぐだ！ 裁判長は会議中だし、家内も不在だ。この文書と、鍵、その他ここにあるものを預かってくれないか？

（書記に、文書と長持の鍵、その他のものを委ねる）

明日、これらをみんな渡してくれ・・・

書記：

奥様にですね！

シャロレ：

（彼を見つめ、ゆっくりと）

ああ！ もし君が明日、彼女に会えたらね！

（故意に無心を装って）

もし会えなければ、裁判長に渡してくれ！ 何も聞かないでくれて、感謝するよ。ご機嫌よう！

（書記はしばらく彼を見つめ、お辞儀をして出て行く）

シャロレ：

（彼を見送り、それから振り向いて、剣を帯びる。決然として）

さて・・・！

（出窓の階段に座っているロモントに向かって）

僕と一緒に行くかい？

ロモント：

（立ち上がって）

ああ！

シャロレ：

どこへ行くのか、尋ねないのか？

ロモント：

聞かないよ！

シャロレ：

子供を連れて来てくれ！

ロモント：

（バルバラが退出したドアに首を向けて）

彼女が拒むだろう！

シャロレ：

（そっけなく）

連れて来るんだ！

(ロモントは中に入る。シャロレは、飾り帯を身にまとい、コートに肩に掛け、帽子に手を伸ばす。彼の視線は、羽根飾りを留めている留め金に吸い寄せられる。彼は、その留め金を引きちぎり、それを床に投げ捨てる)

シャロレ：
(うんざりして)
金だ！ 何もかも金だ！

ロモント：
(部屋から出てくる。絹の毛布にくるまれて眠る子供を抱えている。彼のあとを追って、バルバラが押しかける。以下のやり取りは、大あわてで交わされる)

ほらね！

バルバラ：
何てことをなさるんですか……？

シャロレ：
私が命じたんだ！

バルバラ：
目を覚ましてしまうじゃないですか……

ロモント：
(立腹して)
あんたの金切り声でね！

バルバラ：
伯爵様、あなたは何のおつもりで……

シャロレ：
(彼女を無視して、ロモントに向かって)
君のコートでくるんでやってくれ！
(ロモントは自分のコートで子供をくるむ)

バルバラ：
(絶望して)
一体、何が起こったんです？

シャロレ：
子供は一緒に連れて行く！

バルバラ：
この夜に？ どこへです？ ああ、奥様がここにおられたら！ どうなさったんです？ 私には理解出来ません！

シャロレ：
(ロモントに向かって)
行こう！

ロモント：
どこへ？

シャロレ：
(庭へ出る戸口を指差して)
あの道だ！ あの同じ道だ！

(ロモントは出て行く。上着を掴んでいるバルバラに向って)

離せ！

バルバラ：
(嘆きながら)

旦那様、たとえあなたが去らねばならないとしても、お子様だけは残して行って下さい！ お子様は、お母様のものです！

シャロレ：
離すんだ！

バルバラ：
(不安に駆られて叫ぶ)
お子様を連れて、どこへ行かれるおつもりなんです？

シャロレ：
(厳しく)
どこへだって？！
(バルバラから身をもぎ離し、テラスに歩み出る)
この児にふさわしい所——母親の所だ！

幕

第五幕

(第一幕と同じ宿屋の広間。暗闇。明るい右手の廊下から、条光が差している。窓に通じる階段には、明るい冬の夜の光が落ちている。雪の積もった屋根と舞い落ちる雪が見える。暖炉には、かほそい火が燃えている。入口のドアの脇の壁がんに、火のともったランタンが置いてある。宿屋の主人の父が、寝台の縁に腰を下ろしている。宿屋の主人は、自室に通じるドアの右手の壁に取り付けられた燭台に、細い蠟燭で火をつけている。彼は話の最中である)

宿屋の主人：

(低い声で、愉快そうに)

・・・ちょうど大尉が上る階段を、俺が照らしていた時だった・・・親父さん、眠ってるのか？

宿屋の主人の父：

いいや、ちゃんと聞いているよ！

宿屋の主人：

その時、下の方で、ヒソヒソ話す声、行ったり来たりする音が聞こえたんだ。それから、例の、ここへ上がってくる前に連中が階段の下で必ず歌う、あの歌さ。「誰もあんたを脅して追い払えはしない」とかいう。その歌がきっかけで、俺は、大尉を、廊下に上がる別の階段へ案内し、走って戻ったんだ。すると、連中はもう、階段を上がってくるところだった。フィリップさんと女だ。彼は女をしっかりと抱き締め、支え、彼女の顔が見えないように、彼女の体をすっきりコートでくるみ込んでいた。そこはまだ暗かったので、俺はランタンを取って、照らしてやった。ドアのところで、俺は彼を先に立たせ、後ろに下がった。その時、引きずられていたコートの裾を踏んでしまったんだ。コートは前にずり落ち、俺には、その女が誰だか分かった。誰だと思う？ 当ててごらんよ、親父さん・・・

宿屋の主人の父：

どうしてわしにそんなことが分かる・・・

(入口のドアのところに、シャロレが、帽子を手にし、雪を髭や髪につけたままで立っている。彼の後ろ——まだ廊下のところに、ロモントが、コートにくるまれた子供を腕にかかえて立っている。彼らの後ろには、灯火を持った女中がいる)

シャロレ：

(わざとらしく落ち着いて、ふだんよりも深く暗く響く声で)

今晚、部屋はあいてるかね？

宿屋の主人：

(驚いて)

伯爵様！

シャロレ：

(落ち着いて)

なぜ驚くのかね？

宿屋の主人：

(気を落ち着けようとする。法外に丁寧な口調で)

意外なおお客様でしたので・・・！

シャロレ：

(遮って)

私がかね！ 余計なことを言わずに、答えてくれ。あいてるのかい？

宿屋の主人：

(追従して)

二部屋あいております！

(背後のドアを指し示す。女中に向かって)

ドアを開けなさい！

(窓に最も近い部屋を指し示して)

あの部屋は、今日の午前中、暖房を入れてました。まだ暖かいはずですよ！

シャロレ：

寝台もまだ暖かいだろうよ！ どうだ？

宿屋の主人：

(おどおどして、作り笑いをしながら)

ご冗談を！

シャロレ：

(そっけなく)

その通り、冗談だ！

(ドアを指し示して)

ロモント！ 入ってみてくれ！

(ロモントは、子供を連れて部屋に入り、子供をくるんでいたコートを机の上に置いて、うしろ手にドアを閉める)

シャロレ：

(主人の方に振り向いて、廊下を指差しながら)

あの中には、まだ部屋があるのかね？

宿屋の主人：

(増大する不安を興奮で隠すように)

一つだけあります！ あの部屋は、一か月前から、さる年老いた・・・

シャロレ：

私が聞くまで、待て！

(足早に、宿屋の主人の父親のところに近づく。声をひそめて)

親父さん、あんたは私を知ってるかね？

シャロレ：

この広間を通って入るのかい？

宿屋の主人の父：

いいえ、あなたの声には聞き覚えがありませんが！

宿屋の主人の父：

おっしゃる通りです！

シャロレ：

(彼の肩を掴んで)

おい！ 私はシャロレの息子だ！

シャロレ：

ありがとう！ ちょっと席はずしてくれ！

(女中に向かって)

お前さんもだ！

宿屋の主人の父：

シャロレ様の！

(宿屋の主人に向かって)

あんたは残るんだ！

シャロレ：

嘘をつくんじゃないぞ！ 本当のことを言うんだ！ この宿屋には、一体何部屋あるんだ？

宿屋の主人：

(立ち去る人々を見送りながら、不安げに)

ここにいてくれ！

宿屋の主人の父：

三つです！ ここに二部屋あって、向こうに一部屋あります！

(不安を募らせ、シャロレに向かって)

この部屋に、灯火をともしねばなりません！ それに、シーツを取り換えないと。わたし一人では、とても出来ません！ 彼らには、私が伯爵様のお世話を手助けをしてもらわなくては・・・

シャロレ：

それで下には？

シャロレ：

宿屋の主人の父：

ありません！

(決心がつかずに、ドアのところで立ち止まっている、宿屋の主人の父と女中に向かって)

行くんだ！

シャロレ：

あの階段が通じているドアは？

(刺すような目つきで、宿屋の主人に向かって)

私の世話をするのは、あんただけでいい。ここに私の剣があるから・・・

宿屋の主人：

あそこは・・・

(剣を前方の机の上に投げる)

よく手入れをするんだ！ 聞いているのか？

(犬を呼び寄せるような身振りで)

シャロレ：

(怒鳴りつける)

黙ってる！

こっちへ来るんだ！

(宿屋の主人はためらいがちに近づいてくる。シャロレはすぐそばに寄る。以下のやり取りは、低い声で交わされる。シャロレと宿屋の主人は、間近に相對している)

宿屋の主人の父：

あそこは、息子と嫁の寝室です。

あの中には、誰がいるんだ？

シャロレ：

中の部屋には、入口が一つしかないのかい？

宿屋の主人：

(焦燥を装って、平静さを保とうとしながら)

先程申し上げた通りです。ある老紳士が・・・

宿屋の主人の父：

一つだけです！

シャロレ：

あんたは嘘をついている！